

ノー原稿

2022.5.30

入学式の校長式辞をノー原稿で行った。卒業式の校長式辞もノー原稿でやってみた。とはいっても、一応、原稿は書いている。原稿を手にしていないため、見る人からすれば、原稿なしで話しているように感じられるはずである。

初めてのノー原稿での校長式辞では、まるでセリフを覚えるかのように暗記した。そうしないと、心配でいられなかった。本番では、暗記した内容をゆっくりと話すことを心がけながら、言葉に出していった。何事もなく無難に終わった。だが、果たしてどうだったのだろうか。

二度目のときは、暗記するのはやめようと考えた。だが、当日が近づくと、心配になってきて、いつのまにか暗記しようとする自分がいた。本番はどうだったのか。暗記したとおりに話していないが、ほぼ用意したことは話すことができた。無理に覚えたことを話そうとしないほうがよいことを学んだ。

三度目は、原稿も書かずにやってみようかと考えた。しかし、当日が近づいてくると、また不安感に襲われ、結局、原稿を書いてしまった。それでも、おおよその内容を頭に入れてだけで本番に臨んだ。すると、今までよりは、ゆっくりと心を込めて話せたような気がした。

以上の三回は、用意したものに沿っていたのでまだいいが、今年の3月11日の卒業式は参った。事前に考えていた内容は、どこかにいってしまい、全く用意していなかったことを話してしまった。それは、緊張のせいではない。涙腺が崩壊したためである。まさか、校長式辞で涙を流すとは考えなかった。その前兆はあった。卒業証書授与の場面である。この時点ですでに涙腺は緩んでいた。

最近は、様々な行事での話やあいさつもノー原稿で行っている。事前に用意しないこともある。直前になって考えたり、その場で考えたりすることもある。案外、そのほうがうまくいくから不思議である。昔からわかっているのだが、人前で話すのは難しい。

ノー原稿での校長式辞をやるたびに、もう一人の自分がささやく。「無理をしないで原稿を読んだらどうですか」当日の本番を迎えるまでの変な緊張感はなかなかのものである。果たして、ここまで自分を追い込むことに何か意味があるのか。毎回、そう思う。

3月24日に、福島市内の校長先生方の会議があった。その際に、ご退職される校長先生が挨拶された。ある小学校の校長先生のご挨拶がすばらしかった。内容はもちろんのこと、その話し方、話しぶりに感銘を受けた。新たな目標が見つかった。目指すべき到達点がわかった。

ノー原稿だ、暗記だなどと言っている場合ではない。ましてや泣いている場合ではない。日頃からの鍛錬がなければ、何十年という弛まぬ努力がなければ、あのレベルには到達しないように思う。人前で話すたびに、あの校長先生に少しでも近づけたかという振り返りをしていきたい。